

「いかなる奏事ありけれども」考

山 田 潔

一 はじめに

一九八五年前後の頃、故山田忠雄先生の主宰による研究会で、三年間ほどかけて『古今著聞集』を読んだことがあった。テキストは、故佐々木峻氏の御厚意により、広島大学図書館本の写真を用いた。読解の過程でさまざまな問題が取り上げられたが、標題に掲げた「いかなる奏事ありけれども」も、その一つであった。第二五二話「中御門大納言宗俊の箏叡感を蒙る事」に属する語句であり、後に全文の叙述法を問題にするためであった、ここに全文を引用すれば、左のとおりである（以下、本文の引用は岩波古典文学大系本に拠る）。

後三條院は、管絃をば御さたなかりけり。さりながら中御門大納言宗俊の箏をきこしめしては、「此卿が箏はたゞ物にあらず。道においてうへなき物なり」とて、御顔色も変じまし／＼て御感ありけり。白河院も此人の箏をきこしめしては、御落涙ありて感ぜさせ給けり。按察大納言宗季に仰せられけるは、「我宗俊が箏をきゝて、おほく滅二罪

障一に、非管絃者、嗚呼のおぼえとるべきなり」とぞ御叡感ありける。さて、ことに御憐愍ありけり。知足院殿は、彼卿まいられければ、いかなる奏事ありけれども、きこしめされず。御箏さたありて、毎度に興に入らせ給けり。(205～206頁)

本文全体の意味は平易であるが、当該の「いかなる奏事ありけれども」は、通常感覚では、「いかなる奏事ありとも」が自然であって、なぜ「ありけれども」であるのか問題となった。問題点は二つあり、なぜ「ども」なのか、さらに、なぜ「けり」が用いられているのか、である。研究会においてさまざまな議論がなされたが、山田忠雄先生の納得される結論は得られなかった。

この問題については、今日に至るまで筆者の頭の隅にあったが、その後、「けり」の用法については井島正博氏の、「ども」の用法については小林賢次氏の、それぞれ示唆に富む御論考に接することができた。また、二〇〇二年には『古今著聞集』の索引も刊行され、本文も把握しやすくなった。それらを手掛かりに、「いかなる奏事ありけれども」の解釈を試みたい。

二 「けり」の用法

まず「けり」の用法の検討から始める。過去の助動詞とされる「けり」は同じく過去の助動詞とされる「き」と対比して論ぜられることが多く、その中で、今日に至るまで有力な説とされているのは、細江逸記氏の、「き」は目睹回想を表わし「けり」は伝承回想を表わすという説である。⁽¹⁾ 端的に言えば、「き」は言語主体の直接経験を、「けり」は間接経験を表わすというものであるが、この区別によって律しきれない用例が多々あることは周知のとおりである。

「けり」は歌物語・説話文学などの「物語」に多く用いられているが、そのような物語の語りの形式という観点から、『竹取物語』の「けり」の用法について画期的な説を展開されたのが阪倉篤義氏であった。阪倉氏は『竹取物語』に「なむ…ける」という叙述形式が多用されていることに注目され、次のように説明される。⁽²⁾

「き」が、過去の事象をそれとして主観的に回想する態度を表すに對して、「けり」は、むしろ過去の（あるいは過去からの）事象を、ある程度客観視して、これを常に現在との関聯という立場においてながめようとする態度を示すと言ってもよからう。（中略）要するに、「けり」には、このような解説のないし説明的な叙述の態度を著しく認めることができると思われる。しかも、これと屢々あい伴って表れる「なむ」という助詞もまた、本来、聞き手への確かめを意図して用いられるものであって、かくしてここに、「なむ…ける」という形を持

った表現は、いわゆる「物語る」という叙述の様式にとって、正にふさわしいものであり得たのである。（18頁）

ここで注目すべきは、「けり」は解説のないし説明的な叙述の態度を表わすと捉えている点である。そして、このような「けり」は、『竹取物語』を大きく八章に分けたときに、それぞれの章の冒頭と末尾、ないしは段落の切れ目に多く現われることを指摘されている。そして、その役割を次のように説明される。

『竹取物語』の作者は、もとからある竹取説話の構想を借用して、これを文学に形象化せんとした。そのような枠をまず設定した結果、前述した如く、その内部の叙述に与る文章は、濃密な重なり合いを示し、互いに連続して切れない。この連続を断ち切るものとして、「けり」を以て終止する一群の文があった。「けり」がつくという語が生まれたように、ここで叙述は結末がつけられ、次にまた別の新しい世界が展開するのである。（21頁）

以上の阪倉篤義氏の説明は、「けり」を「過去」の助動詞という時制から捉えるのではなく、物語の叙述形式における役割という観点から捉えている点において意義がある。

さて、右のような物語の叙述形式という観点から「けり」の用法を分析したものとして、近年の井島正博氏の説があり、その説明が本稿の「いかなる奏事ありけれども」の解釈の直接の手掛かりとなる。⁽³⁾

井島正博氏は、まず、「時」の把握について、「話題時」と「表現時」と

を区別する。「話題時」とは話題世界における過去・現在・未来であり、「表現時」とは語り手の置かれた対話の場を流れている時である。さらに、物語の叙述形式をウチ・ソトという観点から、語り手が「話題世界の出来事を、出来事に密着してあたかも話題世界の中にいるかのように描く」のをウチの視点、「話題世界の出来事をそれとは別次元の表現世界にいるものとして描く」のをソトの視点とされる。そして、ウチの視点の場合は、話題時現在の出来事は現在形で描かれるとし、これを「話題時現在」と呼ぶ。一方、ソトの視点の場合、語り手の視点は表現時現在に置かれている。そして、その表現時現在が「話題時現在のずっと未来に「投射」され、そこから振り返って全知の立場で描く」のが物語の最も好まれた叙述形式であり、その場合、話題時現在には「仮構された表現時現在に対して相対的に過去として位置付けられることになり」、これを「相対時過去」と名付ける。以上を踏まえて、過去の助動詞キ・ケリの用法の相違について次のように説明される。

古典語では、ケリが用いられるのは、相対時過去の場合であり、キが用いられるのは、話題時過去ないし表現時過去の場合であると言えるのではなからうか。そうして、話題時現在の出来事が描かれる場合には、ケリが用いられればソトの視点で描かれていることを、 ϕ （過去助動詞なし）であればウチの視点で描かれていることを表わしていると考えられる。（53頁）

同様の指摘は、藤井貞和氏にも見られる。藤井氏は、「物語のなかを流れる現在」を「物語現在」と名づけ、「けり」は「基本的に、物語の過去

の時間に起点をもつことからを、いまに流れる物語現在へと合流させるやぐめを持つ」⁽⁴⁾と把握される。一方、「き」のほうは「物語のいまをさかのぼり、過去はこうだったというのを語るときは「き」という」と説明される。同様の把握方は、つとに鈴木泰氏にも見られる。鈴木氏は、「き」が「過去の特定の時間にある事実が存在したことを表」わし、「その事実は過去において完全に終結しており、その事実が在ったことの影響が現在に残っていないことを示」すとされる。一方、「けり」は「単に過去の事実を表すのではなく、現在に於ても続いている過去の事実を表すという性質を持つ」⁽⁵⁾とされる。

井島正博氏に代表される右の説に対しては、さらに細かな検討が必要となるが、ケリが用いられた場合、それは「相対時過去」であって、話題世界においては「現在」の事柄であり得るという指摘は重要である。以上の考えに基づき、「いかなる奏事ありけれども」を検討する。

三 文中の「けり」

第二五二話「中御門大納言宗俊の箏叡感を蒙る事」の本文全体を眺めると、七つの文で成り立っていて、「きこしめされず」を除いては、文末はすべて「けり」である。説話文学において「けり」が多用されることは周知の事実である。ただし、「きこしめされず」に句点を施したのは、校注者の判断によるものであるから、読点とすることも可能であり、次の文などを参考にすれば、筆者は読点のほうが適当であると考ええる。

猫やがて逃はしりけるを、人々追てとらへんとしけれどもかなはず、

「きこしめされず」の句点を読点に訂正すると、第二五二話の本文は次の六文になる。

- ① 後三條院は、管絃をば御さたなかりけり。
- ② さりながら中御門大納言宗俊の筆をきこしめしては、「此卿が筆はたゞ物にあらず。道においてうへなき物なり」とて、御顔色も変じまし／＼て御感ありけり。
- ③ 白河院も此人の筆をきこしめしては、御落涙ありて感ぜさせ給けり。
- ④ 按察大納言宗季に仰せられけるは、「我宗俊が筆をきゝて、おほく滅二罪障一に、非管絃者、嗚呼のおぼえとるべきなり」とぞ御叡感ありける。
- ⑤ さて、ことに御憐愍ありけり。
- ⑥ 知足院殿は、彼卿まいられければ、いかなる奏事ありけれども、きこしめされず、御筆さたありて、毎度に興に入らせ給けり。

このように訂正すると、六文の文末はすべて「けり」で終わっていることになる。説話の典型的な表現形式ということになる。

さて、本稿において問題とすべきは、文中(「非文末」)の「けり」についてである。「けり」の未然形は、奈良時代の「けらずや」という特殊な表現形式を除いては、辞の下接する用例を見ず、また、「けり」連用形は存在しない。しかし、連体形「ける」には辞および体言の下接した用例があり、また、已然形「けれ」にも「ば」「ども」の下接した用例が認められる。そのような文中(「非文末」)の「けり」は、分析すれば、さまざまな問題を含んでいるものと考えられる。本稿では、当面問題となっている

「けれ・ども」に限って、以下分析してみたい。

『古今著聞集』には、接続助詞「ども」の用例が二八一例あり、そのうち、「けれ・ども」の用例は一〇八例認められる。まず、注目されるのは、その用例のすべてが、井島正博氏の「相對時過去」に属することである。

後に、「過去の習慣」の用法について取り上げるので、そのような用法を表わす「たびたび・けれども」の用例を、まず幾つか引用する。

- a 入道の右大弁真観を、仙洞の御会にたび／＼めしありけれども、まいらずして、一首の歌をたてまつりける、(第二七話 194頁)
- b 金時が轡たび／＼ぬけたりけれども、おつる事はなかりけり。(第三五四話 285頁)
- c 此久清、たび／＼競馬つかうまつりけれども、一度もまけざりけり。(第三六六話 293頁)

右の「たびたび・けれども」という逆接の用例は、後件が「おつる事はなかりけり」のように、何かが実現しなかったことを表わしているので、時制については、順接の場合と違って、把握しにくいが、「金時が轡たび／＼ぬけたりけれども」という時と「おつる事はなかりけり」という時とは、物語の時の流れにおいては連続していると見て良いであろう。もとより言語は線条的なもので、物語の場合、前件は後件よりも時間的に先に生起した事柄として記述されるけれども、その場合でも、物語の時の流れは、前件と後件との間で断絶することはなく、連続している。藤井貞和氏が「けり」は「基本的に、物語の過去の時間に起点をもつことがらを、今に流れる物語現在へと合流させるやくめを持つ」と説明されるのは、右の

事柄も含意するものと考えられる。

それに対し、過去「き」の場合は著しく異なる。まず、次のような用例がある。

汝をとうにいとまとらすべかりしかども、此大事を思て、今日までいけておきたる也。身の安否は、このたびの合戦によるべし。

(第三四〇話 277頁)

右は義経をかばった廉で召し捕られた番(つがふ)を、十二年の間処罰せずにおいた頼朝の言葉である。前件の「とうに(Ⅱとつくに)」いとまとらすべかりしかども」と後件の「今日までいけておきたる」とには十二年の隔たりがあるのであり、「き」はこのように現在から遠く隔たった過去を表わす。また、次のような用例も認められる。

立帰てむかひあはんと思候しかども、いかにもたてあひぬべき心ちもせず候しかば、うしろより逃出て河に入て、水の底をくどりて、八幡へまかりて、そのたびはたすかりて候き。(第四四一話 357頁)

右は、強盗として名を馳せた小殿が昔の思い出を語った場面である。前件「立帰てむかひあはんと思候しかども」と後件「いかにもたてあひぬべき心ちもせず候しかば…」とは時間的に連続しているが、「そのたびはたすかりて候き」という文末からも知られるように、事柄全体を遠い過去の出来事として語っているものであって、井島正博氏の「話題時過去」に属するものである。このようにして、「き」は前件が後件と隔たった過去を

表わすか、前件と後件との結び付き全体が遠い過去を表わす点で、「けり」の用法とは異なる。

以上から確認できたのは、前件「けれ・ども」は後件と時間的に連続するものであるということであるが、この「けれ・ども」の「けれ」は省略し得るものであることは次の用例によって知られる。

かくたび／＼しけれども、いかにも落かゝらざりければ、あやしくて女をよりてみれば、かたびらのむねに大きな針をさしたりけるが、きら／＼としてみえけり。(第六九四話 522頁)

かくたび／＼すれども、なをこさるつきければ、もろともに地に落ちけり。(第七一七話 536頁)

文中の「けり」が省略できる理由は、その一文によって表わされている事柄が「相対時過去」であることは、文末の「けり」によって知られるので、文中のいちいちに「けり」を用いる必要はないことによるものと考えられる。かくして、「いかなる奏事ありけれども」は、「いかなる奏事あれども」と、表現上何らかの相違はあるのであろうけれども、テンスの把握においては同質であることが許されることとなる。次は、その「あれ・ども」という「已然形+ども」の用法の問題である。

四 「已然形+ども」の用法

「已然形+ば」が偶然確定・必然確定・現然仮定の三用法を有することを見・提唱されたのは松下大三郎氏であるが、「現然仮定」も一種の確

定表現であるから「恒常確定」と呼ぶのが適當であると提言されたのが阪倉篤義氏であつて、今日、この三用法は広く一般に認められている。阪倉氏はこの偶然・必然・恒常の三用法は、仮定条件にも、さらには、逆態接続表現にも認められることを指摘し、「ども」を用いた恒常確定の用例として次のものを挙げておられる。⁽⁸⁾

a イカナ大勢クレドモ、タテ一帖デカマユル。マタ大勢デセムルトモ城ニマモツテ居ゾ。『毛詩抄』

b タトヒ女ノ袖ヲ引ト思ウ物ガアレドモ女ガ正イ程ニヤト云テナラヌゾ。(同)

c いかに賤しい者なれども時としては貴人高家の助けとなることもあるものぢや。(天草本『伊曾保物語』)

順接の恒常確定は、前件が成立すれば必ず(いつでも)後件が成立することを表わすものであるが、逆接の場合は次の二つの用法に分かれる。第一は、前件が成立しても、通常その結果継起すると考えられる事態が成立しないか、もしくは、予想外の事態が成立することを表わす。第二は、前件が後件の成立にとって不適当と考えられる事態であっても、後件が成立する場合のあることを示す。用例 a b が前者、用例 c が後者にあたる。

小林賢次氏は、かかる条件表現の諸相とその通時的変遷を詳述されたが、「ども」を用いた恒常確定として、次の用例を指摘されている。⁽⁹⁾

「自然ニ生ズルトコロノ草木ワ養イ育ツルコトガナケレドモ (ha-geredomo)、大キニ繁昌シ、五穀ノ類ワ養育スレドモ (yoicu suredomo)、

栄ユルコトワ少ナイガコノ儀ワ何ト」(天草本イソボ415)

さて、「いかなる奏事ありけれども」の「いかなる」は、先の引用例「イカナ大勢クレドモ、タテ一帖デカマユル」に見られるように、室町期には「イカナ」の形で現われるが、その「イカナ」には「トモ」「ドモ」ともに呼応した用例が見られる。まず、「イカナ…トモ」には次のような用例が認められる。⁽¹⁰⁾

イカナ物カ打伏ウトスル共フスマイソ (京大本孟子抄 一26才)

イカナ知音ナリ共ソノヤウナ無道ナ物トハ中ヲタカウテステウマテソ (京大本孟子抄 一46才)

イカナ重宝ナ玉ナリ共ソレハ玉ツクリニミカ、セイテハ玉ニハ成マイソ (京大本孟子抄 一50才)

次に、「イカナ…ドモ」には次のような用例が認められる。

イカナイヤシイ物テ御座アレトモ其心カ無心無念ニソ物ヲ問ニ来レハ始終ノ二ノ端ヲ残サス伝ユルソ (叡山文庫本論語抄 三7才)

聖人ハ涅ニスレトモクロマステイカナ悪人ニソヘトモ悪クハナラヌソ (叡山文庫本論語抄 五3才)

「イカナ…トモ」は恒常仮定、「イカナ…ドモ」は恒常確定と言われるものであるが、その相違は、恒常仮定は後件の文末が推量表現であり、恒常確定は後件の文末が現在形であるというものであり、意味内容は近似す

る。実際、次の「イカニ」の用例に見られるように、同一の表現内容に対し、「トモ」「ドモ」の両様が見われる。

イカニ美人ナリトモ心地ガ悪テハサテゾ（京大図書館本論語抄 一44ウ）
イカニ美人ナレトモ心地カワルケレハサテ也

（叡山文庫本論語抄 一58オ）

このように、恒常確定は「已然形＋ば・ども」に認められるものであるが、この表現形式が現在または過去の事柄について用いられると、現在または過去の習慣を表わす。「已然形＋ば」について、小林賢次氏が『天草本平家物語』の次の用例を指摘され、「過去の習慣的な事実を述べたもの」と説明されるのは妥当である。⁽¹¹⁾

清盛ノ召シツカワルル禿トサエ言エバ、道ヲ過ゲル馬、車モヨケテ
通シ（一・一12）

筆者も、かつて、『玉塵抄』から次のような用例を指摘したことがある。⁽¹²⁾

伯牙カ琴ヲヒケハナンノ心テ引レタトキ、知タソ（三六36ウ）
客人ガアツテ帰レハ三人ノ子カデ、送タソ（八67ウ）
ソノ車カモシモヤフレ損スレハ卿大夫カ後車ヲコシラエテアトエノセ
テモタセテノマセクワスルソ（三五41オ）
甲ヲイサセテ不入射タ者ヲキツタソ射手カ悪兵ト云心ソ鎧ヲイテモシ
矢カ入レハ具足ヲトイタ者ヲキツタソ（三五24ウ）

また、『古今著聞集』にも次のような用例が見出される。

強盗をすべらかさむ料に、日くるれば、家にくだといふ小竹のよをお
ほくちらして、つとめてはとりひそめけり。（第五六一話 440頁）

かかる用法が「已然形＋ば」に認められるのであるから、当然「已然形＋ども」にも認められるはずであり、実際、『古今著聞集』にもかなりの用例が見つかる。その中で次のように、「已然形＋ども」と「連用形＋けれ・ども」の両様が認められるのは注目される。

黄色なる水の油のごとくにきらめきたるぞ涌出ける。汲ほせども干ざ
りけり。（第三〇話 260頁）
さる程に、件の後戸の砌の下に、うつつに水あり。貴賤くみけれども
尽ざりけり。（第五八話 95頁）

また、次の用例は、「物語時現在」で表現されているけれども、文脈上、「たびたび（マタハ、どんなに）注意なさっても」の意味で用いているものと考えられる。

花山院右のおとどるとき、侍共七半といふ事を好て、ありとしある物
ども、よるひるおびたゝしく打けり。おとど、せいしたまへども、も
ちゐず。（第四二三話 332頁）

これらを踏まえて、「いかなる奏事ありけれども」の用例の解釈に入る。まず、阪倉篤義氏の指摘された、次の用例の「イカナ」は「いかなる」の新語形であることは言うまでもない。

イカナ大勢クレドモ、タテ一帖デカマユル。マタ大勢デセムルトモ城ニマモツテ居ゾ。『毛詩抄』

右は、恒常確定に属する用例であるけれども、「どんなに沢山の軍勢でやってきても」の意味であろう。「いかなる……ども」の用例は『古今著聞集』に見られないけれども、「いかに」の用例に次のものが見つかる。

件の御経を御経宮に入られたりけるを、とりいだされるけるに、その御経見えず。いかにもとむれどもなかりければ、在継をめして、うらははせられけるに、(第三〇〇話 242頁)

澄恵僧都、いまだ童にて侍ける時、介錯しける僧、かみけづらんとて手箱をこひけるに、そのてばこうせにけり。いかにもとむれどもみえず。(第四四三話 358頁)

右は、「どんなに探し求めても」の意であり、「もとむれども」の行為がたびたび行なわれた点では、過去の習慣に、用法が近似する。

また、次の用例は『慶應義塾大学斯道文庫蔵 百二十句本平家物語』に「イカナル事アレドモ」とあるのを、『天草本平家物語』では「何たることとがあれども」のように「和らげ」ているものである。文脈からして過去の習慣を表わしていると認められる。

頃ハイカナル事有レドモ泣玉フハカリニテ分軍物モ宣ハサル人ノ例ナラス彼様ニ宣丁ノ恠シサヨ(巻第九 汲古書院複製本 556頁)
日ごろは何たることとがあれども、お泣きあるばかりではかばかしうものをもおほせられぬ人、例ならずかやうにおほせらるることの怪しさよ(四・一〇 281頁)

かくして、「いかなる奏事ありけれども」の類例は『古今著聞集』に見出すことはできないけれども、右に掲げた用例を傍証として、当該の「已然形+ども」は、恒常確定逆接の用法から派生した、過去の習慣を表わすものと把えることは可能である。

五 「いかなる奏事ありけれども」の解釈

前節までで確認したことは次の二点にまとめられる。まず、文中の「けり」は表現上省略することができ、したがって、「けり」のある場合とない場合とでは、少なくともテンスの表示に関しては変わりがないということである。つぎに、「已然形+ば」には恒常確定の用法があり、その中に現在または過去の習慣を表わす用法があるのと同様に、「已然形+ども」にも現在または過去の習慣を表わす用法があることである。以上を踏まえると、「いかなる奏事ありけれども」の解釈は次のようになる。

知足院殿は、彼卿まいられければ、いかなる奏事ありけれども、きこしめされず、御筆さたありて、毎度に興に入らせ給けり。

大納言宗俊が奏上事があって、藤原忠実のもとをたびたび訪れた。しか

し、それがどんなに重要な奏上事であっても、取り上げることにはせず、その代わりに、箏の演奏をお命じになって、そのたびに感興を催されたという意味になると考えられる。「毎度に興に入らせ給けり」の「毎度」は「いかなる奏事ありけれども、きこしめされず」にも、意味上及ぶものであるから、それが、過去の習慣であったとする解釈は妥当であろう。

〔注〕

(1) 『動詞時制の研究』(一九三二年 泰文堂) 一三八―一四二頁。

(2) 『竹取物語』の構成と文章』(『国語国文』一九五六年一月 『文章と表現』一九七五年 角川書店 所収 第一章第一節)

(3) 「中古過去助動詞の機能」(『国語と国文学』二〇〇二年一月) および「中古和文の表現類型」(日本語文法学会「日本語文法」二〇〇二年三月) 引用は前者の論文に拠る。

(4) 『平安物語叙述論』(二〇〇一年 東京大学出版会) 三六二頁。

(5) 「テンス」(『国文学解釈と鑑賞』一九八六年一月) 三一―三二頁。なお、同氏『古代日本語動詞のテンス・アスペクト―源氏物語の分析―』(一九九二年初版 一九九九年改訂版 ひつじ書房) 第五章には、学説史を含む、さらに詳密な考察が見られる。

(6) 有賀嘉寿子氏編『古今著聞集総索引』(二〇〇二年 笠間書院) に拠る。

(7) 『改撰標準日本文法』(一九七四年 勉誠社復刻本) 五三四―五五一頁。

(8) 「条件表現の変遷」(『国語学』三三輯 一九五八年六月 『文章と表現』一九七五年 角川書店 所収 第三章第四節 二六五頁)

(9) 『日本語条件表現史の研究』(一九九六年 ひつじ書房) 二五二頁。

(10) 『京大本孟子抄』『叡山文庫本論語抄』は大塚光信先生御所蔵の写真を借覧

させていただいた。『京大図書館本論語抄』は坂詰力治氏編『論語抄の国語学的研究 影印篇』(一九八四年 武蔵野書院) に拠る。

(11) (9) に同じ。二五頁。

(12) 『玉塵抄』の確定順接表現』(『國學院雑誌』一九九一年七月 『玉塵抄の語法』二〇〇一年 清文堂 所収 第四章第二節 二九九頁)

(やまだ きよし 大学院日本文学専攻)